

ある師弟の交わり

大 山 聰

羽白先生は、私の旧制成城高等学校時代の文字どおり新進の、若い先生だった。もっとも私は、かけ違つて、教室の教えをうけたことはなかった。師弟の関係というものは、なんといっても、教室でのふれあいが原点になるものだから、先生と私とは、師弟というにはかなり疎遠な方で、私は先生を熟知しているという資格はなく、むしろ形成力のさかんな時期に、先生の持論である対面対話の教育（『成城教育』24号）をうける機会を失つたことを悔む立場にあるというべきだろう。

しかし、そのように比較的遠い所に仰ぎ見ていた先生であるにもかかわらず、羽白先生については、先生としかいえないような、むかしの師弟関係に特有の、文句なしに頭の上がらぬようなイメージは、たえず私の心の中に生きつづけていたようだ。戦時中のこと、いわゆる外地にいた私は、徴兵を受けて丹波の篠山にあった原隊に入営するために帰国していたことがあった。そんなときにふとその気になって、私は母校の職員室を訪れた。予期していた恩師たちにはほとんど洩れなくお会いすることができたが、なぜか私のあまり知らない羽白先生の姿が見えないのが、私の心にかかった。先生は、当時すでに広島に転勤されていたのだった。たぶん故郷というも

ある師弟の交わり

ある師弟の交わり

のは、ひとの心の中に、それぞれのかたちで鮮明に、きちんと影を刻んでいるもので、そのどこかに予想しない穴があいていると、どうしようもない違和感をひき起こすものなのだろう。私は羽白先生もそこにおられるはずのハイマートを訪ねて、羽白先生の姿のないハイマートを見出したのだった。

成城を去って広島高等学校（後に大学）に移られた先生は、その大学の停年の時まで、その教師として生活を送られた。先生について、私の一番交渉のなかった時期である。しかし、先生の学問上の仕事の大部分はこの期間に生まれ、また教養部長、図書館長など数々の要職にも就かれたらしい。戦時中だったん学界との縁がまったく途切れてから、その後教師の職業を一から始めることになった私などにも、先生が戦後の広島という象徴的な風土の中での文化運動の先達として活躍されていることが、時折り耳に入ってきた。

先生の主要な研究分野は、多分ドイツ・ロマン主義であろう。先生の業績は、たしかにわが国のドイツ・ロマン主義研究史の一角を占めるものであり、先生の資質や性格からいっても、それが自然な成り行きと肯かれるにもかかわらず、「多分」というようないい方をするのは、先生の言及されていることは、必ずしもドイツ・ロマン主義といった限定された領域にとどまらず、とくに現代文学において、広汎多岐にわたっているからである。ドイツ文学者であるに違いない先生は、しかも一定の主題に執念を燃やして、堂々たる体系的理論を展開する学者というよりは、感興のおもむくところ一瞬の機微を捉えて文章を成す文人気質をゆたかに持つ人というべきだろう。うろ覚えの聞き書きで申し訳ないが、そのむかし雑誌「文芸春秋」が、四百字か八百字とかで日本全史を語る文章を公募したことがあり、若き羽白先生が入選されたと聞いたことがある。またあるとき、私の研究室の机の上に、多少の差みを含んだような置きざりで、一枚の紙片が置かれていたことがあった。それは旧制広島高

校の同窓会の記念の催しに当たって、羽白先生草するところの「檄」だった。懸河の声調の中に、男性的な経世の志をさえ覗かせる青春謳歌の美文だった。当世の若者の眼には、あまりにも古風で、たんなる美文佳調とうけとられはしないかと怖れられもしたが、しかし熟視すれば繊細な感受性が全体に滲みとおっていることも見てとれた。おそらく先生はこのような短文を草するのにも、長大な学術論文を作るときと、少くとも同等の精魂をうち込まれるのではないだろうか。文学者としての先生を語るのには、このような文人的な一面を見逃がしてはならないと思う。感受性の繊細といえ、カフカの最初の紹介者ということも、先生のご自慢話の一つである。カフカの最初の紹介者を名告る人はまだ他にもいると聞いているので、だれに軍配をあげるべきかは、事情に昏い私は知らないが、もとよりそれは本質的な問題ではない。いずれにせよ、この今なお世界文学を呪縛の圈内に引きとめている現代の最も問題的な作家の特異な作風に、この種のことを顧る暇をもたなかった戦雲ただならぬ時代に、誰にもおしえられることなく感応されたという事実は、その古風さにもかかわらず新しい現象への透視力を兼ねそなえた、たえず新鮮な先生の感受性を物語るものであり、日本のドイツ文学研究のための大きな功績とすべきであろう。

やや遠方から見れば、おおよそこのような先生と、あまりにも短すぎたが、だれよりも近い同僚として数年間を過ごすことになったのは、不思議なめぐり合わせという他はない。経済学部会議室は、ちょうど旧制高校時代の私の教室があった位置にあり、教授会の折りなど、私は思わず大きなガラス窓に映る樹々のたたずまいを透かして池を見下ろす眺めに見入り、過ぎ去った時に、会議の一員としてはけしからぬ妄想を走らせて心を和ませるのだったが、その上、大抵は終始表情を動かさず沈黙をまもられる羽白先生が隣りに端坐しておられることに

ある師弟の交わり

ある師弟の交わり

よって、いっそう安らぎを覚えた。そして会議が終ると、先生はきまって「ちょっとつき合いませんか。ぼくは一人では気怯れがして飲みに行けないちなので……」と、上原の寄寓先の近所の鮎屋に連れて行かれた。それは、瀬戸内海の漁場のまっ只中に育った先生の味覚の鑑識にかなっただけあって、近來稀に見る美味い鮎屋だった。酒席の先生は会議のときよりは多弁で、時には感極まって涙を流されることもあった。話は多くは先生の持論で例の「対面対話」の説に反かず人間の対面対話的なつながりにかかわる事でもで、先生の人生そのものが、そのような対面対話の連鎖から成り立っている事が窺われるように思われた。そうした座談の中でも、繰り返し聞かれたのは、「対面対話」ときりはなせない、先生の電話嫌いの説だった。先生の電話嫌いは、人間のことばに嘘がまじることは不可避だが、電話という文明の所産がそれを増幅するということから始まっている。事実電話がお嫌いだったようだが、この説は先生にとってことばというものがどんなに大切なものであり、先生がどんなにその真贋に拘泥されたかを示唆する「説」として興味深い。

広島県立美術館長を兼ねて多忙だった先生の成城大学での活動は、主として教室での語学の授業に集中された。私が先生から教室で直接教えをうける機会をもち損ねたことは上述のとおりだが、ことばの意味を身にこたえて知る先生が、生涯にわたって手がけて来られた語学が、鋼のように鍛えられたものだという感触をうけることは難しくなかった。話題はいささか先生から逸れるが、外国との交わりなしには生きて行けない日本という事が、到るところでいわれているのに、今日の大学教育で、昔に比べて外国語が軽んじられているように見受けられることは、私には腑に落ちない。もし明治大正の富国強兵の時代のように、ひたすら外国からまなぶ必要が今日ではなくなったというのならば、それはことばというものをもっぱら先進者から学ぶための手段と限定する

ことであり、あまりにも後進国的な発想であらう。ことばはまず第一に、対等者の心の触れあいのためにあるのである。ことに偏見のない人間性を育てることが成城教育の重要な要因としてであるとすれば、学園でこそ、外国語は重視されなければならないのではなからうか。なぜならことばこそは偏見を消し去るための最大の手段であり、それはほとんど相互理解そのもののからだから。しかしこの種の考えをつきつめてゆけば結局は、羽白先生の電話嫌いの説の基底となっている、国語、外国語を問わず、汎濫する蕪雑なことばの中に真実のことばを探り当てることの大切さというところに行き当たるように思われる。私たちは、羽白先生が蒔かれた種子を大事に育ててゆかねばならぬと思う。もっともこのように条理を構えて、それに拠ろうとするのは私の拙い癖であって、先生ならば「要するに、やればいいんじゃない」といわれるかも知れぬ。否、きっとそういわれることであらう。

誰もが知るように、羽白先生の肉体は瘦軀、鶴よりも軽かった。若い頃胸部疾患を患われたとかで、いまだに風邪をひきやすい体質であるらしく、マスクをかけておられる姿を見ることが多かった。にもかかわらず、先生は毎週広島と東京との間を往復するという、驚嘆すべき粘りをしめされた。新幹線の数時間は、先生のために貴重な読書の時間を提供した。週を措かずに続けられるこの往き復りの旅を指して「まるで維新の志士のような気がする」と、意気壮んなどころを覗かせられることもあった。そして、美術館長の職務はまだ統一している。残された書齋の仕事もあらう。東奔西走を要求する館長の仕事を背負って、もしかするとこうしている間にも、先生は東京の一隅で都塵を浴びておられるかも知れぬなどと思いながら、先生のために、これからもなおいつまでも、稔り多い歳月を折るのである。